

幕末前後における二人の先覚者の地理思想

——吉田松陰と福沢諭吉の旅行記を中心に——

大 嶽 幸 彦

はじめに

筆者は既に、橘南谿と古川古松軒の旅行記を基に、江戸時代後半における旅行者の地理思想を検討したことがある。¹⁾それも、当時の人々による文献・記録によって、人々がいかに日本の環境を知覚したか、二人の旅行者の比較を通して再発見することであった。本稿は幕末前後の二人の先覚者、吉田松陰と福沢諭吉の地理思想を、同じく旅行記を基に検討したものである。

われわれにとって、兩人共極めて著名な歴史上の人物であり、ここでは兩人の地理思想だけを取上げてみたい。もちろん、兩者共、いわゆる地理学者ではないが、地理学を愛好し、地理学の重要性を把握し、事ある毎に強調していた点は本論で明らかにしていきたい。²⁾前稿に引続き、本稿においても個人の地理思想を問題にするわけであるが、個人を問題にする意義等に関しては既に論じたことがある。³⁾そこでの議論を要約すれば、次のようになる。地理学の本質の一端は土地と人間との関係、すなわち風土と人間との関係を明らかにすることにある。筆者は主に和辻の『風土』を取上げる中で、地理学研究的観点から見れば記述内容には様々の誤りが見られるものの、哲学の書物には珍しい体験記風の生き生きとした描写、地理学者の目をも有する和辻哲郎という個人を評価した。というのも、抽象化された人間一般という意味での人間と風土を論ずるのではなく、具体的人間という観点での個人を問題にすることこそ、国際化時代の日本人一人一人の行動への一つの指針を、地理学からも与えうると考えたからである。

ところで、地理学者の素質として筆者の考えている点を申せば、第一に、現地観察を鋭くするために五感を絶えず磨くこと、第二に、地理嫌いの多い一般読者を酔わせるために詩人の目を持つ必要性のあること、第三に、客観的・実証的ではあっても、とかく無味乾燥なデータの叙述に陥いらぬよう、記述には工夫する必要があることを指摘しておきたい。⁴⁾したがって、地理学者の目を持つ者が、何もいわゆる地理学研究者だけに限られぬであろうことは論をまたない。⁵⁾辻田右左男は人文地理学会例会発表要旨の中で、『ロビンソン・クルーソー』の著者であるダニエル・デュフォーを取上げ、地理学者の目を持つデュフォーについて紹介している。無人島に漂着したロビンソンが家畜を養い、土地利用、空間の制御、地形を描写する際、地理的知識を行使していると。また、『イギリス周遊記』はイギリス地誌であり、同時に18世紀初頭のイギリスの都市と農村の状況をみごとに描き出した偉大な歴史地理書であるという。⁶⁾本稿で、いわゆる地理学者とは言えぬ吉田松陰と福沢諭吉の地理思想を取上げたのも、実は、地理学者の目を持っていたと思われる兩人に注目したことに他ならないのである。吉田松陰と福沢諭吉の地理思想を検討してみたのは、幕末前後という、いわば明治日本の国際化時代に、兩人の持つ地理学者の目が世人に与えた大きな影響の基になる地理思想を迫体験し、併せ地理学のさらなる発展を願うことにある。また、一方は尊王攘夷派、他方は文明開化派の雄と正反対に見なされる両者が、実は本質的には同質の精神構造の持主であった点を明らかにしようと考えたからである。最初に、吉田松陰の地理思想から検

討してゆくことにしたい。

I 吉田松陰の地理思想

辻田右左男は吉田松陰の地理思想について詳しく論述を行っている。吉田松陰が兵学者、経世家、地理家という自意識からあくまで厳正忠実、かつ客観的に日本各地の風土・物産・戸口を観察、それらをきわめて簡潔に、地誌的に記述した点を指摘している。⁷⁾吉田松陰といえ、日本では右翼や国粹主義者の尊崇の対象で、松陰はその伝記を明治26年にはじめて書いた徳富蘇峰から、昭和45年11月25日(旧暦の10月27日にあたる)という松陰刑死の命日を選んで割腹自決した三島由起夫にいたるまでの、日本の思想的右翼の偶像のようにみなされてきた。⁸⁾本稿は吉田松陰の思想全体を検討するのではもちろんなく、ただ憂国の情に駆られつつ、地理書をひもときながら展開された松陰の地理思想を、日記の記述から考察したものである。松陰の有名な言葉、‘地を離れば人なし、人を離れば事なし、故に事を成さんと欲する者は、応に地理を究むべし’、の考えはどのようにして生れたのであろうか。本稿では主として松陰の旅行記録を検討することにより、松陰の地理思想の一端を明らかにしてみたい。

さて、吉田松陰は兵学家として日本各地の同学・同憂の士を訪ね、異国船撃退のための海防策を説くために全国行脚の道へ出ている。ここで若干の検討を試みた松陰の地理的考察は、その際の副産物に過ぎない。大きくいえば、松陰は10台の学問修業から20台の実践活動へと転じているといえる。中国の古典の読みすぎか、文中では大げさな表現があり、志はとてつもなく大きい、命を軽んじる嫌いがあり、不惜身命で後世に名が残れば良いとしているようである。本文で検討する如く、皇国思想が背景にあるし、命を粗末にするわけであるから、戦時中の軍国主義に松陰が利用されたのはもともとであろう。地理学の観点から松陰の地理思想を検討する際、あまり地政学に近づかぬよう呉々も注意しなくてはなる

⁹⁾
まい。

吉田松陰は萩でのちっ居中に、読書録を作っているが、列強への危機感が外国地理書へ目を向けさせたようである。例えば、『睡餘事録』には次の記述がある。

「蘭夷の我が邦に航するは必ず瓜哇^{じやば}より發す。乃ち瓜哇の事、審かにせざるべからず、故に海島逸誌¹⁰⁾を読む」。

『廻浦紀略』は、幕府軍ないし夷船との戦争に備え、長州藩の海防を公用で視察して歩いた時の記録であるが、軍事面からの地形観察等に、すぐれた地理的思考が見られる。次に、『西遊日記』は、松陰21才の8月25日より12月29日に至る迄の九州遊歴日記であるが、各地で交友を作ると共に、読書・海防策の抄録に苦心没頭している様子がうかがわれ、徒歩・馬での旅中、随所で地理的考察をも試みている。一方、『東遊日記』は、松陰22才時に江戸に遊学し、萩より江戸までの道中を記したものであるが、近郊農業の観察等に地理的考察がみられる。さらに、『東北遊日記』は松陰が無断で江戸から東北へ向かったため、結果的に長州藩を脱藩したことになるが、22才から23才にかけ兵学的立場における実地見聞を行った記録である。その際、何でも見ておこう式の地理的好奇心の一端は、次の記述にみられる。すなわち、

「古今の得失、山川の形勢、凡そ目撃する所は皆日を以て之れを記さんとす¹¹⁾」。フィールドに出た地理学者そのものといえよう。

ところで、松陰の抱く地理へのイメージは次にみる如く、山水、すなわち、自然地理をさす。

「驛を出で、筑波の二巔を極む。……余は地理に暗く且つ獨行躑々たれば、其の山水を論評する能はざるを憾みと為すのみ¹²⁾」。

あるいは、地理、イコール地の利式の常識的なものである。すなわち、

「大阪より八木に赴くには、道、田尻嶺を躑ゆるを便と為す。余地理に詳しからず¹³⁾」。

途中、立ち寄った水戸の人情に関し、次のように述べているが、たとえ事実であるとしても、一生に一度限りの出会いに関し、一般人には率直・寛大になる傾向があるので、このまま首肯しうるかどうか定かではない。

「水府の風、他邦の人に接するに款待甚だ渾く、歡然として欣びを交へ、心胸を吐露して隱匿する所なし¹⁴⁾」。

また、地元の地理学者、長久保赤水の著書について述べ、「好んで天下を漫遊し、地学に精研す、後抜かれて土籍に登る¹⁵⁾」と評しているように、地理学者とは地学者なりの考えに近い。

旅中にあっては、

「上田より白川に至る、山聳え……其の山水は或は吟人墨客の観に適すと雖も、其の農桑の業に於ては困苦も亦何如ぞや¹⁶⁾」と農民に同情する。無謀というか不惜身命を示すものとしては、

「將に會津を辭して北越に抵らんとす。雪深きを以て之れを難しとする者あり、詩を作りて之れに答ふ¹⁷⁾」と言いつつ、雪中行を強行する。その際、次のような光景を見て、

「皆面をつつみ頭を冒ひ、僅かに両目を窺すのみ、比々皆然り、亦土風の笑ふべきものなり¹⁸⁾」と記しているが、顔を寒風から保護する習俗に気づかず、旅行者にあり勝ちな表面的とらえ方を松陰も免かされていない。しかし、開墾と労働力との関係については、卓抜な見方を披歴している。

「矢本に至る。大道平直なること砥箭も音ならず、左右は皆平原荒蕪なり。土質は沙土潤を含み、開墾すれば以て美き田地と為すべし、意ふに人力未だ足らざるならん¹⁹⁾」。

『發丑遊歴日録』は浪人の身となった松陰が再び江戸へ、さらに横須賀へ儒者・兵学者を訪ねつつ、記した日記である。これにも地理的考察が多いが、ここではいくつかを列記するにとどめたい。

「芸は産物甚だ多く、…²⁰⁾」。

「而して陸地の高砂・二見の諸浦は灣港なく、少

しく風浪あらば則ち断じて碇を寄すべからず、是れ艱險たる所以なり²¹⁾」。

「河泉の間は女工甚だ盛なり、男子も亦閑なるときは則ち綿を紡ぐ、亦一奇なり²²⁾」。

以上、松陰が獄につながれるまで諸国を漫遊し、各地の兵学者たちと国防策を議論してきたのも、「進んで天下を跋渉し形勢を熟覽し、以て他年報国の基を為さんとのみ²³⁾」との強い決意によるものであった。平川祐弘の述べるように、「たしかに松陰という一人の英雄だけでなく、多くの志士の心をもった青年たちが、海外に新知識を求めることによって、日本国家の安全と独立に寄与したい²⁴⁾」と願っていたのである。次に、松陰と違って3度にわたって海外渡航に成功し、明治時代の思想界に大きな影響を与えた福沢諭吉の地理思想を検討することにしたい。

II 福沢諭吉の地理思想

福沢諭吉に関し、辻田右左男は諭吉が3度欧米諸国を訪問し、その経験・見聞を世界地理書に投入し、地理学を日常生活とつながりをもつ実学として把握、机上の空論たらしめなかったところに、福沢の独創性があると指摘している²⁵⁾。一方、生活と遊離しがちな今日の地理学研究が福沢の地理学に対する把握とは正反対の方向、すなわち実学に対する虚学の方向をたどりつつあるのは、けだし当然のことであろう。福沢諭吉は洋学の科目として、読本、地理書、数学、窮理学、歴史、経済学、修心学を基礎的学問として、次のように述べている。ただし、地理学を人々が専門職を得るための教養的学科としてとらえている点は、その後の地理学への軽視につながった影響なきにしもあらずと思われるが。

「右の条々は、人生欠く可らざる学問なり。或は学問と云ふ程のこともなく、人たる者の心得と云て可らん乎。此心得ありて後に、土農工商、各其志す所の学を勤む可し。前条の外に、化学、天文学等、種々の科目あれども、窮理学の中に属するものなれば、別に掲げず²⁶⁾」。

有名な『世界国尽』の中で、論吉は「仮令病苦は忘るとも、わする勿かれ地理の学、物に従がひ事につき、思ひ出すこそ学の道、学びし道をわすれじと、再びここに繰返す、世界中の国尽し²⁷⁾」と述べ、ここでも地理学を学ぶ重要性を指摘している。附録として、地理学の総論をまとめているが、天文の地学（天文学）と自然の地学（自然地理学）と人間の地学（人文地理学）の3つに区分している点は、福沢のアイディアではないとしても、注目されてよい。当時としてはベストセラー的存在であった『西洋事情』も、次にみる如く、外国を敵か味方か知るために書かれたものであり、地理書とは到底いえないであろう。

「余、頃日、英亜開版の歴史地理誌数本を閲し、……これに由りて略ぼ外国の形成情実を了解し、果して彼の敵視す可きものか其友視す可きものかを弁別し、友は則ち之に交はるに文明を以てし、敵は則ち之に接するに武経を以てし、文武の両用其所を錯ることなきに庶幾らん乎。此れ余が是挙の目的とする所なり²⁹⁾」。

また、『西航記』の内容を見ると、フィールドノートそのものであり、未知の国の事象に関し、身ずから聞き取り、観察して読み取っていった様子が見え、地理学研究者の調査態度に通じるものがある。『西洋旅案内』では、世界の気候について、熱帯、温帯、寒帯の三区分で気候のあらましを述べている。また、『条約十一国記』は、貿易中の国について国々の大小、強弱、人情、風俗、政事の立方を大まかに記したもので、世界の国々に関する等級づけ、弱小国をあなごる態度など、今日でも我が国で見られる視点である。例えば、日本は面積では世界の300分の1であっても、人口は30分の1という当時の事実を基に、その後、日本が大国意識を持つ萌芽の一つを読者に植えつけなかったといえるであろうか。すなわち、

「扱其世界の人類を平均して土地の広さに配り附て見るに、一里四方に百二十人の割合となり、日本

國中の人類を日本國中の地面に配り附くれば、一里四方に千二百人程の割合となる。左れば地図でこそ日本は世界の三百分の一つ許りにて、見る影もなき小国のやう思はるれども、其実は全世界を三十に割りて其一分を押領する姿なり³¹⁾」。

或いは、

「亜米利加州も、北亜米利加の合衆国は別段開けたる国にて、世界中第一番の上国とも云ふべき程なれども、其外は格別目ぼしき国もなし³²⁾」と、大国主義まる出しである。

ところで、車窓観察は地理学者養成の基礎的訓練の一方法といえるが、福沢論吉の『西航記』にも、論吉の地理学者たる素質の一面をうかがわせる記述がある。例えば、

「マルセイユより巴理斯までの間は、山岡少く田野曠平なり。土人皆農作を勉め、麦田を耕し、葡萄を植へ、田畔には木綿を樹へ、山腰に至るまでも間地あることなし。然れ共此地方は、米作を主とせざるが故に水田なし。土地は都て薄瘠にして、往々山林あれども、多くは皆雑小樹にして、絶て大木を見ず³³⁾」。

「カイロよりアレキザンデリヤまでの間は道程九十九里、土地都て平低、草木繁殖、土人往々村落を成し、田園を耕し牛羊を牧す。田畝の景況は本邦と異なることなし³⁴⁾」。

ただ、マルセイユの現地観察において兵学的見方が先行するのも、下級武士であっても武士階級生れであった論吉を思い起させる点で、次のように述べている。

「港口の兩岸は、土地稍や高し。各砲台を築て防備あり。港の北に一港あり。之を新港と名く。本港よりも小なり。新港は専ら軍艦の爲めに設るものにして、港内に造船局あり³⁵⁾」。

人間の考察に関しては、旅行者にあり勝ちな独断が見られるが、次にみる如くである。

「カイロに至り土耳其の官舎に宿す。此地は土耳其の都府にして、パシヤ 亜王の義 之に居て、エ

ジプトの地方を鎮す。○気候平康、但し潤雨少し。然れども草木よく繁殖し、麦、木綿等を産して、欧羅巴諸邦に輸出す。○人口五十万、貧人多く、市街繁盛ならず。人物頑陋怠惰、生業を勉めず³⁶⁾」。

日本との比較を試みたものとしては、次の記述がある。

「凡て葡萄牙人は、他国にて造れるものを倣ひ製するは巧なれども、日新の発明少きは日本支那の如しと云³⁷⁾」。

以上の如く、福沢諭吉の地理思想には、読者に与えた大きな影響を考えると、地理学の発展に功罪相半ばする点があったのではなからうか。

むすび

本稿は幕末前後の先覚者として吉田松陰と福沢諭吉の二人を選び、二人共、国難の時に地理学の重要性に気づき、世人に地理学を学ぶよう宣伝ないし実践を試みた点を評価した。というのも、地理学者とは単に大学の地理学科を出た事実や、地理学の著書・論文を読んですぐにわか養成されるようなものではなく、地理学を愛好し続け、既に述べた如く、絶えず地理学者の目をきたえることによって徐々に形成されてくるものと思われるからである。その意味であらゆる人が地理学者になれる素質を持っているといえようし、地理学研究者といえども専門化しているうちに、いつのまにか地理学から逸脱する危険性を絶えずはらんでいるともいえよう。

吉田松陰と福沢諭吉の両者に共通して言えるのは、地理学的観察を行いつつも地政学的見方が随所に見られることで、これは二人共武士であった点に起因するものであろう。同じく海外渡航を志しつつも、吉田松陰は時機尚早で国禁を犯したために捕えられて夢を果さず、福沢諭吉は猛烈な運動をして3度も使節団の一員にもぐりこみ、本論で見た如き現地観察を行い、地理思想をみごとに展開することができた。吉田松陰も海外に首尾よく出ているれば、その後、福沢諭吉と同じような活躍をしていたかもしれない

のである。平川祐弘は吉田松陰と新島襄を比較して、同質の精神の持主と見なし、次のように言う。「吉田松陰と新島襄が二人とも日本人として、優越した西洋文明の挑戦にたいしてみずから進んで応答しようとした⁴⁰⁾」と。

明治維新後と同じく国際化時代になり、日本ないし日本人の行動が世界に影響を与えるようになった今日にもかかわらず、一方で鎖国主義的風潮があらゆる面に見られなくもない。それこそ、一世紀前に福沢諭吉が早、警鐘を鳴らした点であった。すなわち、「然るに今、日本一国に限り、自から神国などと唱へ、世間の交を嫌ひ、独り鎖籠りて外国人を追払はんとするは、如何にも不都合ならずや⁴¹⁾」。ジャパン・アズ・ナンバーワンとお世辞をいわれ、日本が世界に目を向けなくなれば、いつか来た道を再び繰返さぬとは限らないであろうし、その徴候は既に現れているといえるからである。(上越教育大学)

〔注〕

- 1) 大嶽幸彦「江戸時代後半における二人の旅行者の地理思想——橋南谿と古川古松軒の旅行記を中心に——」神戸大学教養部「論集」第28号, 1981, pp. 35~48
- 2) 前掲1) 論文
- 3) 大嶽幸彦『国際化時代の地理学』大明堂, 1980, pp. 107~121
- 4) しかしながら、地理学はきわめて文学的と表現される叙述、無限に微妙な表現、論文が単一的ということではしばしば非難されてきた点を指摘する見解もある。ポージュ=ガルニエ著・阿部和俊訳『地理学における地域と空間』地人書房, 1978, p. 6
なお、本稿では地理学者と地理学研究者の用語を使いわけているが、地理学者とは地理学全体の本質・体系化を考え、なおかつ実践している者をさし、地理学研究者とは、むしろ個別の問題の専門家を目指している者をさしている。
- 5) 竹内啓一は、日本地理学会内の「地理思想史研究グループ」への参加呼びかけの中で、何ををもって「地理学者」とするかという点は、国際的にも

- 多いに議論があるが、アカデミズムの世界に属する人間に限られるべきではないという点では、意見の一致を見ていると述べている。竹内啓一「地理思想史研究グループの課題——問題提起——」日本地理学会予稿集22, 1982, pp. 286~287
- 6) 辻田右左男「Daniel Defoeと地理学」人文地理 26巻5号, 1974, pp. 573~576
- 7) 辻田右左男『日本近世の地理学』柳原書店, 第3版, 1979, pp. 256~263
- 8) 平川祐弘『西欧の衝撃と日本』講談社, 1974, p. 141
- 9) 日本における地政学と地理学との関係を再考したものに、次の論稿がある。Takeuchi, K.: 'Geopolitics and Geography in Japan reexamined, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol. 12, No.1, pp. 14~24
- 10) 山口縣教育會編纂『吉田松陰全集』第十巻, 日記一, 1939, p. 331
- 11) 前掲10) p. 187
- 12) 前掲10) p. 193
- 13) 前掲10) p. 365
- 14) 前掲10) p. 217
- 15) 前掲10) p. 222
 地理学史の研究者、鮎沢信太郎によれば、「長久保赤水は名を玄珠といふ。赤水はその號である。享保二年、常陸國赤濱村に生れ、享和元年七月廿五日、八十五歳を以て逝去した。江戸時代の地理学者として、第一人者である」という。
 鮎沢信太郎『地理学史の研究』原書房, 覆刻本, 1980, p. 123
- 16) 前掲10) pp. 226~227
- 17) 前掲10) p. 234
- 18) 前掲10) p. 272
- 19) 前掲10) p. 295
- 20) 前掲10) pp. 346~347
- 21) 前掲10) p. 352
- 22) 前掲10) p. 359
- 23) 前掲10) p. 417
- 24) 前掲8) pp. 147~148
- 25) 前掲7) p. 278
- 26) 富田正文編『福沢論吉選集』第2巻, 岩波書店, 1981, p. 199
- 27) 前掲26) p. 167
- 28) 一般には、巻一から巻五までの地誌が有名であるが、地理を研究の対象とするものとしては、地誌と系統地理の二分野に地理学をわけて把握しえた福沢論吉の洞察力に注意しなければならない。もっとも、かかる把握は、彼自身の創意ではなく、……と中川浩一は述べている。
 中川浩一『近代地教育の源流』古今書院, 1978, p. 40
- 29) 前掲26) pp. 100~101
- 30) 富田正文編『福沢論吉選集』第一巻, 岩波書店, 1980, pp. 11~68
- 31) 前掲30) p. 84
- 32) 前掲30) p. 73
- 33) 前掲30) pp. 24~25
- 34) 前掲30) p. 22
- 35) 前掲30) p. 24
- 36) 前掲30) p. 20
- 37) 前掲30) p. 63
- 38) Prévot, V.: *à quoi sert la géographie?* Le centurion, 1981, p. 64
- 39) 福澤論吉『福翁自傳』復元版, 角川文庫, 1953, 104頁
- 40) 前掲8) p. 142
- 41) 前掲30) p. 75